

タイトル 砂防事業に関するサポーターの育成

申請者名 敬和学園大学 堀野研究室 代表 堀野 巨求
学生代表 鎌田 逸希

1. 本事業の概要・経緯

私たち堀野研究室では、2020年度から継続的に防災事業に取り組み、新発田市内を中心に活動を行っています。2022年度に開催された新発田市総合防災訓練では、ハザードマップを可視化したダンボールジオラマを作成し、来てくださった地域住民へ避難経路の確認や危険区域の説明を実施しました。その際に、国土交通省飯豊山系砂防事務所と出会い、多くの人の防災意識の向上に努めていきたいという思いが一致し、本事業がスタートしました。

研究テーマは大きく分けて、「地域の砂防サポーターの育成」、「サポーター活動による地域住民の防災意識の向上」という2つがあります。ここでいうサポーターとは、私たちのような学生のことを指し、学生が地域住民と行う防災ワークショップの企画を行い、地域全体の防災意識向上に努めるということが目的です。過去にも様々なフィールドで防災啓発活動を行っており、ターゲットや年齢にあったプログラムを提供してきました。今年度では、プログラムの引き出しを増やすべく、砂防という少しハードな事業を学び、活動の幅を広げることが目標に取り組みました。

2. 地域の砂防サポーターの育成

1つ目の研究テーマである、砂防サポーターの育成では、まず堀野研究室の学生の底上げを図りました。砂防の知識がほぼ皆無であるため、砂防とは具体的にどのような用途があり、地域にとってどのような役

割を担っているかなど基礎的な部分を知ることから始めました。そこで、7月に国土交通省飯豊山系砂防事務所の越野さんより学生に向けた砂防の特別講義を行っていただきました。「写真1(7月特別講義の様子)」また、実際に多くの現地を訪れ、イメージを膨らませることを意識しました。8月は新潟県で一番歴史のある万内川砂防公園で開催されたサマーフェスティバルにスタッフとして参加しました。妙高砂防事務所のご協力により実現し、砂防公園の歴史をイベント参加者に伝える文化財堰堤ツアーのお手伝いや受付、石割体験の補助などを経験させていただきました。この経験から、砂防堰堤の役割や説明の仕方を学ぶことができたと話す学生も多く、今後の活動の基盤となりました。9月の富山遠征では、北陸地域最大級の砂防堰堤を生で体感し、砂防堰堤の考え方を覆された瞬間となりました。そして、100年以上の歴史を誇る立山砂防堰堤の啓発活動を行っている立山砂防女性サロンの会との意見交換会も行いました。研究のテーマに直結する先輩方から活動を継続的に行っていくために意識していることであったり、連携することの重要性であったりと様々なことを教授していただきました。今回の会で最も良かったと感じた部分は、一方的に学生が話を聞くのではなく、お互いの活動の課題点を共有し、改善策やアドバイスを出し合えたということです。このような大変貴重な経験をもとに次年度以降の活動に反映させていきたいと思えます。「写真2(立山砂防女性サ

ロンの会との意見交換会様子)」

防災意識の啓発に学生の力を借りようと、国土交通省飯豊山系砂防事務所（山形県小国町）が、新発田市の敬和学園大学の学生と連携し、「砂防事業

飯豊山系砂防事務所と敬和学園大連携



「サポーター」育成を始めた。知識を深めたサポーターに、災害への備えを語り継ぎ、広めてもらうなど様々な連携を目指す。

防災啓発に学生の力を

出前授業 現場視察 知識深め 備え伝え

分の歴史砂防を伝えるのが目標だ。第一歩として6日には、敬和学園大で飯豊山系砂防事務所長らが出前授業を開催。加川、尾川の水仕事を担当する同事務所の職員らも参加し、過去の発生した被害などの映像を見て、災害の怖さを伝えた。砂防職員の活躍が、防災意識を高め、安全なまちづくりを推進する。出前授業は毎年回を予定。継続的に学習機会を設け、今後のサポーターの育成を学外にも広げたいと考えた。鎌田さんは「身近な学生が中心となって活動することもあると思う。防災意識を高めるだけでなく、学生が積極的に活動することを期待している」と話した。

「写真1(7月特別講義の様子)」



「写真2(立山砂防女性サロンの会との意見交換会の様子)」

3. サポーター活動による地域住民の防災意識の向上

2つ目の研究テーマは、インプットした砂防の知識を地域の方々に発信することが大きな目標です。また、サポーターから砂防の役割を説明するだけでなく、地域の方々と共同で防災グッズの企画・制作も検討していました。

実際のところ、こちらの事業は、なかなか形にすることができず、今年度活動を行って挙げた一番の課題点であります。今までのように元々持っていた防災プログラムを用いて、市内の小学生と楽しく学べ

る機会を創出し、好評価をいただくことはできました。しかし、インプットに多くの時間を割いてしまい、肝心の砂防に関するアウトプットをする回数が少なくなってしまうという現状があります。だからこそ、次年度ではできるだけ多くの地域で今年度の学びを発信できるよう調整していきたいと思います。また、イベントの形態も堀野研究室が主催で行った「まちづくりフェスタ」のように防災色を前面に出すイベントではなく、まちづくりと防災を組み合わせ、防災に興味・関心がない人でも防災に触れられる機会を提供していくことができれば、多方面に影響を与えることが可能であると考えています。「写真3(まちづくりフェスタ様子)」



「写真3(まちづくりフェスタの様子)」